

「骨折する」と「骨を折る」「骨が折れる」について

張 志剛

要旨

一般的に、漢語動詞と和語動詞は文体の違いによって使い分けられるとされるが、「骨折する」と「骨を折る／骨が折れる」のように、新聞コーパスにおいて近い頻度で現れるものがある。全体的に出現頻度が近いとは言え、大量な実例を観察すると、取る内項のタイプ、自他の使用、限定する数量詞の出現位置、連体修飾の主名詞の性質という点においては、「骨折する」と「骨を折る／骨が折れる」の使用傾向の違いが見られた。

キーワード 「骨折」、「骨を折る」、「骨が折れる」、新聞コーパス、使用傾向

1 はじめに

一般的に、漢語動詞と和語動詞は文体の違いによって使い分けられるとされる。書き言葉の文体では漢語動詞が用いられ、話し言葉の文体では和語動詞が用いられる傾向にある。しかし、このような記述はあくまでも大きな流れとしての傾向であり、すべての漢語動詞または和語動詞に当てはまるわけではないという問題が残る。

「骨折する」と「骨を折る／骨が折れる」を例に、異なる文体における両者の出現頻度を調査した結果、小説(話し言葉)を中心とする青空文庫のコーパス¹においては、確かに漢語動詞より和語動詞の方が多く使われていることがわかった。具体的には、「骨折」という事柄を表す漢語動詞「骨折する」の出現頻度は2回しかないのに対し、和語動詞の出現頻度は58回(そのうち、「折る」36回、「折れる」22回)である。

しかし、新聞(書き言葉)という文体を中心とする読売新聞コーパス²においては、漢語動詞が多く使われるという予想と違って、両者はほぼ同じ程度の頻度で使われている。具体的に、「骨折」という事柄を表す漢語表現「骨折する」の出現頻度は1,553回で、和語表現の出現頻度は1,737回(そのうち、「折る」1,465回、「折れる」272回)である。

このように新聞という文体における出現頻度だけを見れば、漢語動詞「骨折する」と和語動詞「骨を折る／骨が折れる」は均等に現れると思いがちであるが、両者は(1)と(2)に挙げた例のようなシンプルな表現方法だけではなく、「骨折」という事柄をより詳しく表すために、(3)と(4)のように内項を取る表現方法も観察されるので、各表現方法の間または各表現方法の内部でもバラつきがあると言える。

(1) 漢語動詞：

太郎が骨折した。

(2) 和語動詞：

¹ 2009年6月1日までの青空文庫に収録された6,856編の小説などを対象とするコーパス。

² 2のデータの概要と調査方法を参照。

- a. 太郎が骨を折った³。
- b. 太郎は骨が折れた。

(3) 漢語動詞：

- a. 太郎は鎖骨{を／が}骨折する
- b. 太郎は左手小指の軟骨{を／が}骨折する
- c. 太郎は足{を／が}骨折する

(4) 和語動詞：

- a. 太郎は鎖骨{を折る／が折れる}
- b. 太郎は左手小指の軟骨{を折る／が折れる}
- c. 太郎は足{を折る／が折れる}

(1)と(2)における「骨折した」と「骨を折った」「骨が折れた」は、表す意味が非常に近く、漢語動詞と和語動詞の対応関係も自他の違いで二通りしかない。これに限っても、漢語動詞と和語動詞は全体的に出現頻度が近い場合、自他による使用傾向が現れる可能性がある。内項を取る(3)と(4)のように表現方法の選択肢が多くなるのに伴って、特定の文体において各表現方法が均等的に使われる可能性が低くなり、その使用傾向を考える必要がある。

以上のことを踏まえて、本稿は新聞コーパスにおいて、「骨折」という事柄を表す漢語述語表現と和語述語表現の使用傾向を探ってみたい。また、使用傾向については、具体的に取る内項のタイプと、自他の使用の傾向を中心に考察する。その他、漢語述語表現と和語述語表現は、数量詞などの修飾を受ける際にその数量詞の出現位置、及び連体修飾する際の主名詞の性質を副次的に見る。

2 データの概要と調査方法

2.1 データの概要

今回の調査用データは、読売新聞のオンラインデータベース「ヨミダス文書館」における、「読売新聞」全国版 2000年1月1日－2005年12月31日、計6年分の新聞記事を用いる(以下、読売新聞コーパスと略する)。

具体的に取り扱う調査対象は、「骨折する」に関する(5)の各形式と、「折る／折れる」に関する(6)の各形式とする。

(5) 「骨折する」

- a. ～骨{を／が}骨折する 例：鎖骨{を／が}骨折する
- b. ～(身体部位)の～骨{を／が}骨折する
例：左手小指の軟骨{を／が}骨折する

³ 「骨折する」が再帰他動詞の用法しか持たないので、「折る」も再帰他動詞用法を対象とする。

- c. ～(身体部位){を／が}骨折する 例:足{を／が}骨折する
 - d. ～{骨／身体部位}{を／が}○○骨折する
例:足{を／が}複雑骨折する
 - e. ～{骨／身体部位}{を／が}[数量詞]骨折する
例:足{を／が}[二箇所]骨折する
 - f. 骨折する{～骨／身体部位} 例:骨折した足
- (6) 「骨を折る」「骨が折れる」
- a. ～骨{を折る／が折れる} 例:鎖骨{を折る／が折れる}
 - b. ～(身体部位)の～骨{を折る／が折れる}
例:左手小指の軟骨{を折る／が折れる}
 - c. ～(身体部位){を折る／が折れる} 例:足{を折る／が折れる}
 - d. ～{骨／身体部位}{を[数量詞]折る／が[数量詞]折れる}
例:肋骨{を[二箇所]折る／が[二箇所]折れる}
 - e. {折る／折れる}{～骨／身体部位} 例:{折った／折れた}肋骨

(5)f、(6)e は本論で連体修飾用法として扱い、主名詞修飾する名詞が「骨折する」または「折る／折れる」の内項に相当する「～骨／身体部位」である場合に限る。従って、(7)のように「重傷」を修飾する「骨折する」「折る」は連体修飾用法として扱わず、それぞれ(5)cの「身体部位を骨折する」と(6)aの「～骨を折る」という用法として数える。

- (7) a. 違反車を追跡中、同市常盤台の男性(75)が運転するオートバイと衝突、男性は右腕を骨折する重傷を負った。(2004.07.27 西部朝刊)
- b. ゴン車が電柱に衝突、助手席の同市、中学1年の少年(12)が右大腿(だいたい)骨を折る重傷を負った。(2005.08.18 東京夕刊)

また、(8)のように「骨折する」が単独で用いられる用例は、上記の調査対象に含まず、「その他」として数える。

- (8) a. 高齢になると小刻みにすり足で歩くようになるのでつまずきやすく、転んで骨折し、寝たきりになる危険も高まるからです。(2000.04.30 東京朝刊)
- b. 各県などによると、二十七日午前零時半現在、転倒して骨折するなど、岩手、宮城など東北五県で計九十人が重軽傷を負った。(2003.05.27 東京朝刊)
- c. 骨粗しょう症は、骨の量が減ってスカスカになり、骨折しやすくなる病気。(2002.06.18 東京夕刊)

一方、「折る／折れる」の場合は、単独で「骨折」を表わす用例が見られず、(9)bのような「苦心して人の世話をする」や(9)aのような「困難である、労力を要する」という意味で用いる用例と、(9)cのような「曲げる」という意味で用いる用例が123例あった。

- (9) a. 小さな子どもを連れて買い物をするのは本当に骨が折れる。(2003. 04. 21 東京朝刊)
- b. 正直言って、個人のために企業がここまで骨を折ってくれるとは思ってもみませんでした。(2001. 02. 23 東京朝刊)
- c. そのとき、彼は腰を深く折り、お辞儀をして「ごめんなさい」と言った。(2003. 10. 05 東京朝刊)

2.2 調査の方法

調査の方法については、以下のように纏める。

手順1: 読売新聞コーパスから「骨折する」「折る／折れる」及びその活用形式⁴を用いるすべての文をそれぞれ採取する。これを第一次データとする。

手順2: 第一次データにおける用例が「骨折」という事柄を表わすか否かをチェックする。不適切な用例を取り除いたデータを第二次データとする。

手順3: 取る内項がガ格(自動詞)かヲ格(他動詞)かという基準で、第二次データをまず二分類する。

手順4: さらに取る内項の種類(「～骨」類、「～身体部位」類、「～身体部位の～骨」類)、数量詞の修飾を受けるかどうか、連体修飾になるかどうか、その他という四つの分析項目によって、データを分類する。

手順5: 各小分類の用例数を集計する。

3 調査の結果と考察

3.1 調査の結果

読売新聞コーパスにおいて、漢語表現「骨折する」の出現頻度は1,553回、和語表現「骨を折る」「骨が折れる」の出現頻度はそれぞれ1,465回と272回である。各分析項目による集計は表1～表4に示すとおりである。

表1 「骨折する」の他動詞の各形式の集計

形式	出現数	割合
～骨を骨折する	133	12.2%
～(身体部位)の～骨を骨折する	15	1.4%
～(身体部位)を骨折する	833	76.1%
～を[数量詞]骨折する	11	1.0%
～を○○骨折する	102	9.3%
計	1094	100.0%

⁴ 今回は使役と受身の形式を調査対象外とする。

「骨折する」と「骨を折る」「骨が折れる」について

表2 「骨折する」の自動詞の各形式の集計

形式	出現数	割合
～骨が骨折する	3	7.3%
～(身体部位)の～骨が骨折する	0	0.0%
～(身体部位)が骨折する	14	34.1%
～が[数量詞]骨折する	2	4.9%
～が○○骨折する	22	53.7%
計	41	100.0%

表1と表2の他に、「骨折する」の連体修飾用法が66回、その他の用法が352回である。

表3 「折る」の各形式の集計

形式	出現数	割合
～骨を折る	195	13.3%
～(身体部位)の～骨を折る	1160	79.2%
～(身体部位)を折る	81	5.5%
～を[数量詞]折る	28	1.9%
計	1464	100.0%

表4 「折れる」の各形式の集計

形式	出現数	割合
～骨が折れる	101	38.8%
～(身体部位)の～骨が折れる	76	29.2%
～(身体部位)が折れる	45	17.3%
～が[数量詞]折れる	38	14.6%
計	260	100.0%

表3と表4の他に、「折る」と「折れる」の連体修飾用法がそれぞれ1回、12回である。

3.2 考察

調査の結果を踏まえて、「骨」の具体化の仕方、自他の使用、数量詞による修飾の仕方、連体修飾という四つの観点から、「骨折」という事柄を表す漢語述語表現「骨折する」と和語述語表現「折る／折れる」の使用傾向を考察する。

3.2.1 「骨」の具体化の仕方

「骨折」という事柄を表す際、「骨」の名称やどの身体部位の「骨」かを具体的に明示するケースが多い。しかし、内項に相当する名詞節に「骨」を含むか否かを数量的に見ると、「骨」の具体化の仕方は、表 5 に示すように漢語表現か和語表現かによってその仕方が違ってくる。特に、漢語動詞「を骨折する」と和語動詞「折る」は、「骨」の具体化の仕方において、相補的な分布に近い現象が起こる。「骨折する」の場合は「～身体部位」が 8 割以上を占めるのに対し、「折る」の場合は「～身体部位の～骨」が 8 割以上を占め、「折れる」の場合も「～骨」と「～身体部位の～骨」を合わせて 8 割近くを占めている。

表 5 「骨」の具体化の仕方

形式	「を骨折する」		「が骨折する」		「を折る」		「が折れる」	
	出現数	割合	出現数	割合	出現数	割合	出現数	割合
～骨	133	13.6%	3	17.6%	195	13.6%	101	45.5%
～(身体部位)の～骨	15	1.5%	0	0.0%	1160	80.8%	76	34.2%
～(身体部位)	833	84.9%	14	82.4%	81	5.6%	45	20.3%
計	981	100.0%	17	100.0%	1436	100.0%	222	100.0%

まず、表 5 に示すように、漢語表現「骨折する」を用いる場合、「骨」の具体化は、「骨」の名称や身体部位の「骨」より、身体部位の名詞だけを利用する傾向がある。

「を骨折する」を詳しく見ると、「～骨」による具体化のうち、出現頻度 5 回以上のものは「右鎖骨(21)、大たい骨(13)、ろっ骨(11)、鼻骨(9)、鎖骨(7)、肋骨(6)、大腿骨(5)」、「～(身体部位)の～骨」によって具体化するものは「左手小指の軟骨(3)、左胸の軟骨(1)、左手首近くの骨(1)など」が挙げられるのに対し、身体部位の名詞だけによる具体化のうち、出現頻度 20 回以上のものは「足(101)、左足(61)、右足(55)、右腕(22)、腕(22)、右手(21)、左腕(21)、左手首(20)」がある。

「骨折」という事柄を表す際、内項に相当する「骨」を含む「骨折する」は、「足、手など」のような身体部位の名詞による「骨」の具体化が最も典型的で、「鎖骨、肋骨など」のように身体部位の名詞で具体化しにくい場合は、骨の名称で具体化する。また、「左手小指の軟骨、左胸の軟骨」のような「身体部位の名詞+骨の名称」という形式で具体化も可能であるが、出現頻度は比較的低い。さらに、「骨の名称」を「骨」だけに簡略化し、「足の骨や手の骨など」のような「身体部位の名詞+骨」の場合は、漢語動詞内部の「骨」と二重内項になるので、最も使いにくくなる。

次に、和語表現「骨を折る」「骨が折れる」を用いる場合は、表 5 に示すように「骨折する」と逆になって、「骨」の具体化は、身体部位の名詞だけより、「～(身体部位)の～骨」や「骨」の名称を利用する傾向がある。

「骨折する」と「骨を折る」「骨が折れる」について

「を折る」を詳しく見ると、表 6 のように出現頻度の上位を占める目的語の名詞は「身体部位の骨」というパターンのもが多い。

表 6 「骨」の種類

目的語	出現頻度	目的語	出現頻度	目的語	出現頻度
頭の骨	272	鼻の骨	49	肩の骨	28
腰の骨	161	右足の骨	45	顔の骨	27
足の骨	130	あごの骨	38	鎖骨	25
首の骨	95	骨	38	左腕の骨	22
ろっ骨	78	左足の骨	32	あばら骨	20
胸の骨	69	腕の骨	31		

身体部位の名詞だけを用いる場合、「前歯(23)、歯(13)」が最も多く、「右足(6)、足(6)、腰(5)、左足(5)」などがそれに続く。

和語動詞「折る」を用いた場合、目的語を担う最も典型的な形式は、「身体部位の名詞＋骨」(頭の骨、腰の骨など)というパターンの名詞節である。そのつぎに多く使われるのは、「骨の名称」(ろっ骨、鎖骨など)、身体部位の名詞(歯、足など)であり、最後は「身体部位の名詞＋骨の名称」(足の腓骨など)になる。

3.2.2 自他の使用傾向

この節では、漢語表現「骨折する」と和語表現「折る／折れる」の構文特徴として両者の自他の使用傾向を見てみる。3.1の調査の結果から表7が得られる。

表 7 漢語表現と和語表現の自他の使用

	漢語表現		和語表現	
	「骨折する」	割合	「折れる／折る」	割合
自動詞	41	3.61%	272	15.66%
他動詞	1094	96.39%	1465	84.34%
合計	1135	100.00%	1737	100.00%

表 7 に示すように、漢語表現においても和語表現においても自動詞より他動詞の方が高い使用率を占めている。特に、漢語表現の「骨折する」は、他動詞用法が96%超を占めている。

ここでいう「他動詞」は「骨折する」にしても「折る」にしても「再帰他動詞」の用法を対象とするので、表7の自他使用の分布から見れば、「再帰他動詞」が自動詞に近い性質を持つにもかかわらず、「骨折する」と「折る」においては再帰他動詞の用法と自動詞の用法の間には明らかな使用傾向が存在すると言える。

また、(10)と(11)のように、人間性の主語を持つ文では、ほとんど「再帰他動詞」を用いることにも関連性があると考えられる。

(10) 同区の男性会社員(53)が徒歩で通勤中、滑って転倒し左足首を骨折した。

(2003. 01. 29 西部夕刊)

(11) 高畠町金原の会社員加藤春樹さん(43)が妻の実家の一階屋根から庭に落ち、腕の骨を折った。(2001. 01. 08 東京朝刊)

一方、(12)と(13)のような例は少し見られるが、このような文は人間性の主語より人間性の主題を持つ文といった方がいいかもしれない。

(12) 女子生徒は兵庫県西宮市内の病院で十日夜に緊急手術を受けたが、右目が損傷し、周辺部が骨折しており、現在も入院中。治療費は主催者が全額負担する。(2001. 08. 23 東京朝刊)

(13) 二女は右腕の骨が折れ、顔や体に多数の傷があることから、虐待が日ごろから繰り返されていたとみられる。(2004. 12. 13 東京夕刊)

最後に、表7の結果に鑑みると、自動詞用法を選択する場合、漢語表現の「骨折する」より和語表現の「折れる」を選ぶ傾向が見られる。

3.2.3 数量詞などによる外部修飾

この節では、内項の限定の仕方として数量詞の修飾を受ける際の漢語表現と和語表現の傾向を見る。最後に、「骨折する」特有の述語限定の仕方を見る。

数量詞の位置が「動詞前」か「ガ格／ヲ格の前」かによって集計した結果は表8のとおりである。

表8 数量詞による修飾

数量詞の位置	「を骨折する」		「が骨折する」		「を折る」		「が折れる」	
	出現数	割合	出現数	割合	出現数	割合	出現数	割合
動詞前	9	81.8%	1	50.0%	17	60.7%	19	50.0%
ガ格／ヲ格の前	2	18.2%	1	50.0%	11	39.3%	19	50.0%
計	11	100.0%	2	100.0%	28	100.0%	38	100.0%

表8に示すように、出現頻度から漢語表現(13回)と和語表現(66回)を比べると、和語表現の方は数量詞の修飾を受けやすい傾向にある。特に、自動詞用法の場合は、「折れる」の38回に対して、「が骨折する」は2回しかない。

また、漢語表現の場合、(14)のように数量詞が動詞の前に来るのが圧倒的に多い。(15)のようにガ格／ヲ格の前に数量詞が来るのは3例だけである。

(14) この事故で吉田騎手は右ろっ骨を数か所骨折し、全治2か月と診断された。
(2003. 06. 29 東京朝刊)

(15) あん馬の練習中にポメル（取っ手）の上に胸から落下。精密検査の結果、肋骨2か所を骨折していることが判明した。(2004. 11. 10 東京朝刊)

一方、和語表現の方は、数量詞の現れる位置が比較的自由である。

(16) ソ連軍が侵攻していた時代、アフガンで記者（鈴木）はろっ骨を二本折った。
(2001. 10. 09 東京朝刊)

(17) その際、女性は路上に倒れ、ろっ骨二本を折る大けがを負った。(2001. 05. 04 中部朝刊)

数量詞が内項の修飾を通じてより複雑な表現を実現するが、和語表現の「骨折する」は、「疲労骨折する」や「複雑骨折する」のように複合化することによって、より複雑な述語表現を可能にする。

(18) 昨年10月、国立公園でジョギング中に、左足首を複雑骨折した。(2000. 05. 16 東京朝刊)

(19) 左内側くるぶしのけんを脱きゅうし、甲の骨も疲労骨折した。(2001. 09. 14 大阪夕刊)

3.2.4 連体修飾における特徴

ここでいう連体修飾は内の関係になるものを指す。具体的に(20)(21)のような連体修飾を対象とする。

(20) 先場所11勝の魁皇は昨年秋場所前に骨折した右手親指がほぼ回復し、期待ができそう。(2001. 01. 07 東京朝刊)

(21) 現地報道によると、一人は折れたろっ骨が肺に刺さる重傷。(2000. 06. 22 西部朝刊)

漢語表現と和語表現の連体修飾の出現頻度は、「骨折する」が66回、「折る」が1回、「折れる」が12回である。出現頻度から見れば、漢語表現の「骨折する」は最も内の関係の連体修飾になりやすく、和語表現の「折る」は最も内の関係の連体修飾なりにくい。(20)(21)のように連体修飾節が「骨折」になった結果を表すことは、このような出現頻度の差に関係していると考えられる。一般的に、自動詞が結果を表す役割を担うので、「折る」の出現頻度が低くなったのかもしれない。「折る」を用いる連体修飾の唯一の例が(22)である。

(22) 折った歯を接着剤でくっつけてプレーを続けた猛者でもある。(2004. 09. 29 東京朝刊)

同じ自動詞用法をもつ「骨折する」と「折れる」は、修飾する主名詞が「身体部位」か

「～骨」かによって違いが見られる。「骨折する」の連体修飾用法の66回のうち、54回の主名詞が「身体部位」で、後の12回の主名詞が「～骨」である。これに対し、「折れる」の連体修飾用法の12回のうち、2回だけの主名詞が「身体部位」で、後の10回の主名詞が「～骨」である。この結果から見れば、主名詞が「身体部位」の場合、「骨折する」は最も連体修飾に用いやすい。

4 まとめ

日本語では、「骨折」という事柄を表すために、漢語表現の「骨折する」と和語表現の「折る／折れる」が用いられる。以上の考察を通じて、同じ言語環境である読売新聞コーパスにおける漢語表現と和語表現の共存は、両者が違う役割を果たすことに意義があることがわかった。

まず、構文のレベルでは、漢語表現でも和語表現でも他動詞用法の使用が絶対優勢である。自動詞用法の場合は、和語表現の「折れる」を用いる傾向にある。

次に、同じ他動詞用法が優勢である「骨折する」と「折る」は、内項の具体化において相補分布に近い現象が起こる。つまり、「骨折する」は内項を具体化するには「～身体部位」を用いるのが8割以上であるのに対し、「折る」は「～身体部位の～骨」を用いるのが8割以上を占めている。

また、内項をさらに修飾する数量詞の使用及び出現場所においては、和語表現は漢語表現より数量詞の修飾を受けやすく、出現場所の制限もあまり見られない。一方、述語をさらに修飾する形式においては、関係の手段に欠けている和語表現に対して、漢語表現の方は複合化を利用し、より複雑な現象を表すことが可能である。

最後に、漢語表現でも和語表現でも自動詞用法が連体修飾に用いられやすいが、主名詞が「身体部位」である場合、「骨折する」が最も用いられやすい。